対話型マップ記録による省察

○灰谷知子・髙橋陽子・杉浦真紀子（お茶の水女子大学附属幼稚園）・小玉亮子（お茶の水女子大学）

Ⅰ．はじめに

本園では、毎日保育後に学年で１枚の「対話型マップ記録」を３人の担任（2クラス・２担任と、学年付きの保育者）で書いている。４年前からこの形式で記録を書くようになった経緯やこの記録を書くことの意義については、第75回日本保育学会、更には海外の２学会で発表し、論じてきた。これまでの検討で見えてきたことは、第一に、各保育者の思いが伝わり合い、翌日の保育につながる。第二に、１枚の記録用紙に書き込んでいくことで、空間的時間的な出来事の変化を捉えられる。第三に、複数の保育者が対話しながら見たこと、考えたことを記録することで、子ども同士の関係性を多面的に見ることができ、子ども理解を促進できる。第四に（一つの出来事について書かれた３学年分の５か月におよぶ記録を分析したところ）学年を越えて、その出来事に関わる複数の子どもや保育者の関係性、保育者の関わりなどから本園の教育理念「子ども主体の保育」を確認できるものである。以上４点である。

「子ども主体の保育」においては、単に保育者が子どもに追随するものではなく、ましてや子どもを自由にさせているわけでもなく、そこには柔軟に変容する計画があり、保育者の子どもへの関わりがある。そこで、今回は、「子ども主体の保育」であり同時に「週案」という保育計画を持って保育をしている、幼稚園の教育のあり方が、今回開発されている記録の中でどのように位置づけられるのか、そして、この記録が保育計画にどのように寄与するものであるのか、この点を明らかにしていく。

Ⅱ．「対話型マップ記録」

まず初めに、対話型マップ記録であるが、以下のように日々記入していく。

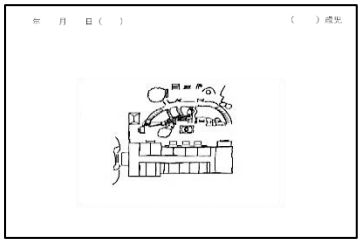

図１　マップ記録の用紙

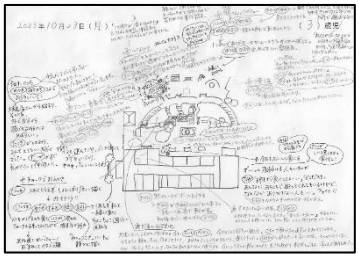

図２　３人で書きこんだ記録

保育後に各学年担当保育者がその日の保育を記録する。

順番や何を書くかは各自に任されており、書けないことにも意味があると考えている。

記入に当たっては、書きたいと思った出来事の場所に書き出すが、その後書く教師は、空いているところに、マップや書いてある文章から線を引っ張ってきて、その後の遊びの様子や気づきを書くこともある。最後に、全員が書き終わった用紙はファイルしておき、自由に見返せる。記録上でやりとりすることで「対話型マップ記録」と呼ぶが、いつも保育者同士の語り合いにつながっていく。

Ⅲ．１週間を振り返る「ドキュメンテーション」

対話型マップ記録のほかに、本園では、１週間を振り返る記録として、「ドキュメンテーション」を作成している。これは１週間の出来事を保育の写真で綴り、そこに短い言葉を添えたものである。

図３　ドキュメンテーション

日々の写真記録は、担任が撮ることもあるが、全学年付きの保育者（全体フリー保育者）が撮ったものから選ぶことになる。この保育者は、保育後に語り合われている担任の話や前日の保育からのつながりを考えて、写真に収めている。そのため、むやみやたらと撮るのではなく、１週間のつながりが見えてきたり、担任が気になっている遊びや子どもの姿を捉えたりした写真になっている。そのことからも、「対話型マップ記録」から派生する語り合いの意義が見えてくる。

そのように作成された「ドキュメンテーション」は、２つの目的を持つ。一つは、翌週の保育計画となる「週案」の作成、もう一つは保護者への発信である。

保護者への発信については、学年の「ドキュメンテーション」を週明けに登降園で使用する玄関に、掲示やファイリングして公開している。学年の全員の子どもや遊びが載っているわけではないが、学年や幼稚園全体の様子や季節や行事等の中で、様々な子どもや先生たちと共に暮らしていることを伝えるものとなっている。保護者からは「最初は、我が子の姿を探していましたが、段々と他の子の変化や成長も見ることができて、周りの保護者との話もはずんでいます」という声が聞かれ、本園の意図を理解するようになっていく。

また、「ドキュメンテーション」の近くに付箋を常備し、保護者の感想や気づき、質問などを書いて貼ってもらうシステムを取っている。それに対して、保育者はそのことで気付かされたことや思いなどを付箋に書いてその隣に貼る、ということを行っている。そのことで、保育者の立場からは、保護者がどのように感じたのか、子どもは家庭でどのような話をしているのかなどが伝わってきて、どのように園の取り組みが子どもや保護者に受け取られているのか、知る機会となっている。一往復半以上のやりとりに

なることもあり、このやりとりを利用して、面談や懇談会で保育者の考えや保護者の思いを伝え合う機会になることもある。

このように保護者と保育者との間でも対話が生まれることから、「対話型ドキュメンテーション」と命名し、やりとりの積み重ねにより、今、大事にしていることや幼稚園の教育理念を伝えるだけではなく、次週以降の学年の計画に保護者からの思いを生かすことにもつながっていると考えている。

週案の作成については、次の項で、具体を示しつつ分析する。

Ⅳ.「ドキュメンテーション」から「週案」作成へ

先にも述べたように、「対話型マップ記録」や全体フリー保育者の撮った写真から、この週の様子がわかるように「ドキュメンテーション」を作成している。記録として、行事の様子や季節的なことも含まれるが、今まさに週の記録として残しておきたい遊びや姿で構成する。子どもの表す様は一人一人違うことは当然であるが、新入、進級してから一緒に、同じ空間で過ごしてきている学年の子どもたちには、何か大きなうねり、変化を感じることがある。それは、学年の中だけでなく、異学年と一緒に暮らしていることで浮き彫りになることもある。今回は、5月中旬に繰り広げられた「ビワ」にまつわる出来事から、3歳学年に特化し、「対話型マップ記録」「ドキュメンテーション」「週案」のつながりを論じる。

1.「対話型マップ記録」より

①5月16日（火）

「初めてお山（園庭にある高台）に出かけた。うれしい」という記述がある。「初めて」とあるが、4月11日に入園した3歳児は、自らお山に向かい遊んでいたり、担任もその子どもたちを迎えに行ったりして、実際には行ったことがあったであろう。しかし、入園したばかりで様々な心もちでいる子どもたちを保育室に残して率先してお山に行くことはできなかったことがうかがえる。ようやく1か月が過ぎ園の暮らしに慣れてきたことや、前週に親子遠足に出かけたこともあり、戸外でからだを動かした楽しさや自然の中で過ごす心地よさがからだに残っていることが子どもたちの姿から伝わってきたことを、保育者自身が嬉しく思っていることが読み取れる。

②5月26日（金）

この日は3歳児親子のみが登園し、親子で三々五々好きなこと、やってみたいことで遊ぶ日だった。降園近くになると、お山のビワが切り分けられて届き、「なんでビワ？」という雰囲気の中、ビワを食べながらみんなが集まるのを待っていた。

②5月31日（水）

「ビワ採りを応援」の記述があり、年長児、年中児がお山の上で始めたビワ採りを応援したことが記述されている。その後、降園時に保育室にビワを届けてもらうと、「おいしいとおかわりをする人も。全員食べた」という様子が続く。ビワ採りを先生や他の子どもたちと応援したこと、そのビワを届けてもらったこと、それを食べていることがつながっておいしく食べたのだと考える。

2．5月29日から6月2日の「ドキュメンテーション」

①ビワに関する内容

中央に「ビワ採りが大盛り上がり」というタイトルで、ビワ採りを応援したり、少し参加させてもらったりする写真と共に、届いたビワをクラスで食べている写真が載っている。また、その後「大きい組の遊びは楽しい。・・・いつもありがとう」の見出し。ビワ採りの様子を保護者に伝えつつ、大きい組（年長児・年中児）との関わりの中で心と体が動き出している子どもたちの姿を伝えようとする記録となっている。

②保護者からの付箋

図4　付箋でのやりとり

「昨日みんなでビワ食べたんだよ、おいしかった、とうれしそうに教えてくれました。幼稚園で採って、その場で食べられるのはうれしいですね」「家では話はしませんでしたが、嬉しそうに食べたかな？と想像します」というコメントが寄せられた。幼稚園でビワを食べたということを子どもが家庭でも話題にしていたことがわかり、子ども自身が幼稚園と家庭とをつないでいることを教師も改めて感じることができた。また、写真記録をきっかけにして我が子の姿を想像し安心につなげている保護者の様子も読み取れた。

3．翌週（6／5～6／9）の週案へ

予想される遊びとして「ビワ採りを見る」前週の幼児の様子から、「年長児たちのビワ採りを一緒に応援したり食べさせてもらったりして、季節の恵みを皆でわかり合う気持ちを感じていけるようにしたい」という記述がみられる。

また、環境の構成・教師のかかわりには、「誘われたり、出かけたりして出会った年中児、年長児とのつながりを大事にしたい」「教師や友達、年長児の動きをじっと見ている姿を大切にし、その人なりに動き出したり表現したりする瞬間を捉えて支えていく」とある。

このような願いや援助は、生き生きと自分たちのやりたいことに取り組む年長児の姿を一つのきっかけとして、子どもたちが動き出す姿を支えようということを学年で共有して翌週の保育を行おうとしていると言える。

Ⅴ．おわりに

以上、本園の記録はいずれも、複数の保育者間、複数の保育者と複数の保護者間の「対話」によって作られている。記録と記録が対話し、「子ども主体の保育」が共有され、次の週案が生成される。子どもたちの生活を支え、作り出していく保育計画として位置付く週案といえども、それにとらわれることなく即興的に、柔軟に保育が変わることもよしとしている。それは日々の対話によって、お互いのことを理解し、保育の中の大切なことを実現しようとする営みである。このように、対話による記録は、残すものであるだけでなく、生み出すものであるといえよう。